

山岡莊八

書きおろし長篇小説

燃えろ軌道

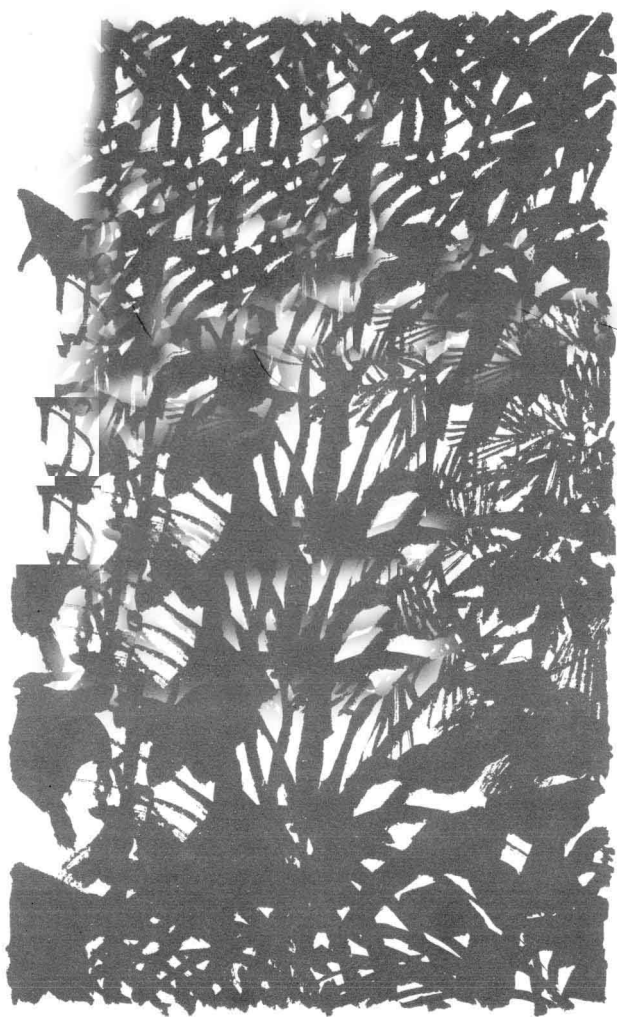
4 天声の巻



山岡莊八

燃え、軌道

4 天声の巻



学習研究社

燃える軌道 第4巻 天声の巻

昭和51年5月25日 初版発行

著者 山岡 莊八

発行者 古岡 滉

1 発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4-40-5

郵便番号 145

電話 東京 720-1111

振替 東京8-142930

印刷 壮光舎印刷株式会社

製本 株式会社若林製本工場

編集責任 桜田 満

編集担当 藤原宣夫

編集協力 ダイニチ出版株式会社

©1976 Sôhachi Yamaoka

Printed in Japan

※この本に関するお問合わせやミスなどがありましたら、文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)学研ユーザー・サービス部「燃える軌道」係へ、電話は東京(03)720-1111へお願いします。

目次

神の計算、 人の計算							
	暁の星	世界を吹く風	信仰と権力	虹の果実	迷い花野	山を仰いで	信仰と人生
154	134	121	99	83	60	33	7

関東大震災の教訓

174

模倣は奴隸

199

哲人への道

237

陰徳の翁

274

組織への情熱

293

装幀・題字

挿画

田代

光

燃える軌道

4

天声の巻

信仰と人生（二）

人間の生涯しょうがいにおける父と子との永別は、人生最大の悲劇の一つであろう。香川県の本島支教ほんじま会に身を寄せて、ひそかに病軀びようくを養っていた広池千九郎博士が、父半六翁（七十九歳）死去の電報を、転送のち手にしたのは、すでに歿後ぼつご二日目の、八月十一日のことであった。

父半六翁は、八月八日に発病して、翌九日には亡くなっていたのだから、その年齢から言っても、その信仰（郷里の真宗正行寺しんしやうぎやうじ）から言っても、充分に天寿を全うした大往生ぶりであったと言える。

したがって、ここで特に注目すべきことは、その嫡男である博士が、同じ信仰を奉じて直ぐさま葬儀に駆けつけ得さえすれば、悲嘆は悲嘆として、あっさり葬送だけは済む筈はずのところであつた。

ところが千九郎博士は今、その実父と信仰を異にしている。それも所謂文部省（始めは内務省）から派遣された天理学園の教師団と、教団そのものの信仰を懸かけて鋭い対立を続けている

時なのだ。

いや、表面は双方ともひたすら「——お道一筋！」を堅持しているかの如くに装いながら、内実では、その対立はいよいよ尖鋭化していたところだ。

これを世間的な言葉でいえば、博士や本部は同じ神道でも伊勢神宮派であり、学園の教師団は本居宣長派なのだ……と言った方がわかりよいかも知れない。

しかし今は、そうした事も言っていられる時期ではなかった。

「とにかくこれを持って、直ぐに郷里へおいで下さい。何しろ今は八月の始めですから、ご遺体もそのままにはしておけません」

本島支教会の片山会長は、病身の博士を急ぎ立てて、自分の工面した二百円の金を持たせて北九州へ出発させた。

その頃の博士は、前にも記したように、烈々たる宣教活動はしていながらも、体重を計ると、シャツ数枚に、ネルの単衣、黒ネルの襦袢を重ね着したままで十一貫五百匁という貧弱な肉体なのだ。恐らく本島からの船の心配なども、周囲の人々をハラハラさせるものがあつたに違いない。

「ご心配はいりません。二百円ばかりでは足りないのはわかっていますから、後の費用は私が工面して、すぐに後から追いかけます」

当時の博士の日記を抜萃^{ばっすい}してある「道德科学研究所」の記録によれば、こうして急遽^{きゅうきょ}九州に渡った博士は、翌十二日、福岡県の北九州市、今の小倉地区南部の城野^{じょうの}へ駈^かけつけて、先ず父の葬儀を仏教で済ましている。

「――十二日、福岡県城野にて仏葬にする」

「――そして、十三日、中津に行く」

「――十六日、天理教中津分教会にて神葬にする」

記録にすれば、まことに簡単なものであったが、これは、天理教そのものにとっても、広池千九郎博士とその事業にとっても、それぞれ重大な岐路を決定してゆくほどの意味を含んだ出来事だった。

敢^あえて言うならば、父半六翁の死が、実は、その子千九郎博士の、新しいモラロジーの行く手を指示することになった……といってもよいほどの出来事なのだ。

とにかく十六日の、郷里中津分教会の神葬はこの地方の人々の眼を瞠^{みは}らせるに足るものだった。

これも博士の日記の中から抜萃してみると、博士は、別に教団の松村幹事に手紙を出して、大正八年度分の手当金二百円也下げ渡し^{すたな}の儀を頼み込んで許可されている。

即ちこれより前、大正六年の春に、博士は本部から六百円也の金円を借用した。そのうち二

百円也を同年中に返金し、七年度に三百円、八年度に百円也を返して差引ゼロになっているので、改めて二百円也拝借したいと申し入れ、それを許可されているということだった。

この金は多分、本島の片山会長に借りて出発した二百円也の返済に当てる気だったのに違いない。

「――八月十二日、城野にて仏葬。

――八月十三日、中津に行く。

――八月十六日、中津分教会にて神葬。竜王墓地。本部より祭主、本部員山田右衛門殿をお下し下さる。

字鍛冶屋の下千六番地。畑一反二十五歩。地価十六円五十四銭。地租七十四銭。古城正行寺内、末広観。新博多町大西伝次。老人会計三宅勇一。

――八月十八日、中津出立。中野真吾氏小宅に一泊」

と、なって、父とゆかりの正行寺内に墓地を求めて葬儀のことはひと先ず終った。

ところがその直後から、本部の所謂文部省派の諸氏から、猛烈な抗議が出たものらしい。

恐らく、本島支教会の居候という身分に過ぎない広池千九郎のために、何故、本部部員を祭主として派遣し、盛大な中津分教会葬を営む必要があったのか？ という詰問だったと思われる。

この事について、逆に博士は、十月二十八日に至って、次のような決心を日記に書き記している。

「——十月二十八日。今回いよいよ多年の宿望たる本部手当の辞退を決心する。但し我はこのまま頂いて、後日献金するも可なれど、目下の^{ところ}処、分らぬ者の中傷うるさしと思ひて、以上決心する。しかしながら、それは頂いておいて、これを献金させて頂く形式を取る。その金の半分は本部員と青年とにご分配願ひ上げ候こと」

そして更にその夜の追記として、

「——以上の献金は、小生健康回復の上、いよいよお助け一条に従事致すようになりし月より実行す」

と、書き加えられている。

当然博士はこの事も、本島の片山会長に相談した。すると片山会長は言下に首を振って言った。

「——それは違いますよ、先生。先生は、神様が必要なりと認めて、前管長をして本部へ引き寄せさせたお方です。これをあれこれ非難する方が、この教団の理のわからぬ人と言うべきです。理の分らぬ人々の言うことに心を動かして、前管長の定められた報酬を謝絶するということになると穏やかではありませんよ。それに先生は、社会から将来必ず今日の十倍以上の報酬

の得られる人と思われているのですから。そこでこの金額は少いにしても、この場合は、ひと先ず穏やかに納めて下さい」

そう言つて、会長は、二百円を受取るどころか、逆にそれに三百円を加えて渡して、

「——これを奥様に届けてあげて下さい。こんな不幸のあつた時には、奥さまにも眼に見えない苦しさがあるものです。ええ、私は何れ、神さまを通じて返して貰いますからご心配はいりません」

そう言われては、流石の広池千九郎も、言うべき言葉を持たなかった。そう言えば東京の夫入のもとへも、暫く生活費を送つてなかつたのだ。

そこで、本島の支教会長の好意をそのまま、当時まだ独身の子息、千英氏宛に送り届けた。当時、千英氏は小山のあたりに住んでいたらしい。

むろんその金は、直ちに東京のはる夫人の手に渡されて、一家の危急を救うことになったのだが、この実父半六翁逝去事件で、特に注目すべきことは、博士が、この父の葬儀を二回やっているという信仰上の潔癖さであつた。一度は城野において仏式で、そして更にもう一度は自分の信仰に従つて、中津で神式で……

この点は、博士は自分の信仰如何にかかわらず、心から家族の信仰、家族の自由を尊重していたことがよく分る。

長女の嫁いだ折の金原明善翁きんばらめいぜんとの話にもあった通り、信仰はどこまでも個人の意志によって決定すべきことであって、たとえそれが両親であり父子の間であっても、決して強制さるべきものではないという、厳しい自戒の上に立っているのがよくわかる。

半六翁の場合は、むろん季節が猛夏であり、その訃報ふほうが遅れて本島に到着したという手違いもあったが、とにかくそのけじめはハッキリとつけられていた。

それだけに葬儀のことで、本部の教師団の中から、あれこれ苦情が出て来た時には、恐らく抑えきれない怒りがあったと思われる。しかも、その私憤を発することこそ最もきびしく戒めてあるのが、天理教の教義そのものなのだ。

それにすでにその当時は、労働問題がその後の世界のガンになると見透みとおして、朝鮮から南洋諸島まで開発伝導の相談を始めている最中だったのだ。

八月三十一日の日記にも、その事に対する苦悩と配慮が克明に記されている。

「八月三十一日——予より返上せし二百金を、本島会長は予に与えらる。予いろいろ辞し、且つ予の志と事情とを述べしに、二百金に更に三百金を加えて春子に賜与せらる。これは事情複雑なれば別に記す……」

こうして小山にありし子息千英氏宛の送金となったのだが、その当時の博士の胸中には、布教についても、この事件の解決についても、すでに私案は出来上っていたようだ。

「——（八月三十一日日記）(1)、ご本部の理に従うこと。(2)、甲賀、蒲生、勢山（博士とゆかり深い三大教会）へは金にて理を立つること。こちらは度々布教の着手を話し込めど、力不足の由をもって断る故に、金少々ながらこれを上りて理を立つること。(3)、モラル・サイエンス（道徳科学）の完成と上流の布教を為すこと。布教の結果は講社又は教会を設け、自から統率するも苦しからず。又人にさせるも苦しからず。この辺はすべて神様任せのこと。(4)、住居は東京を八分とすること。(5)、本島（支教会）の心に任すれども、それは小生を健康にし、且つ小生の財政を助けて、小生の事業を完成せしめ、つまり、神様と本部とに忠節の心よりするように心得ていただくこと。必ずしも教会信徒を求めしめる心使いにては面白からずとの事をご承願うこと。但し小生は出来るだけ本島のために尽力すること」

いふなれば、この決心が、父の半六翁を失ったあとの、本島支教会に身を寄せてあった千九郎博士の得た、偉大な果実であったといえる。

博士が学校から追われた頃の心境と比較すると、全く別人の観がある。